



ハビタットとは生物が生息場として利用する一定のまとまりをもった場所のこと。

時とともに移り変わる木曽川の河原。

自然共生研究センターの実験施設上流部、東海北陸自動車道の通っている一帯は、400年前の関ヶ原合戦の折、家康方の東軍が木曽川の本流を渡ったところで、これを迎え討った岐阜の城兵と激戦を交えた古戦場です。

現在は上流にできた大型ダムによって、大洪水はめったにおきませんが、それまでは岐阜県側の右岸堤と、愛知県側の左岸堤を一面の濁流によって埋めつくされることがしばしばあり、その度に流路が変わり、河原の様子が一変していました。

明治期までは今の新境川より北に本流があり、そこを白帆をはった舟が上り、いか

だが下っていました。本流が南へ移っても、元の川辺には、春ともなればネコヤナギの花がいっぱい咲き、秋にはハギやスキの花が咲き誇り、仏花として、またお月様へのお供え用として、よく取りに来たものです。

ところが、河川改修で本流が現在の位置に移った頃から、ネコヤナギは次第に姿を消してマルバヤナギの大きな木が繁り出し、ハギもスキも激減し、ヌスピハギの天下となり、今では年毎にオオキンケイギクの花園が広まりつつあります。

近頃の河原の移り変わりには目をみはるものがあり、ぼやぼやしておられないのが実状です。[宮崎惇(木曽川を愛する会)]



かつてのネコヤナギの群生は次第に姿を消しつつある。

河原には、どんな昆虫が生息する？

多くの河川には玉石や砂が一面に広がる河原が見られます。一見すると生えている植物もまばらで昆虫がいそうな環境には見えません。しかしよく観察すると、そこには河原に特徴的に生息する昆虫がいることに気づきます。代表的な種としては、ツマグロキチョウ、ミヤマシジミ、カワラバッタ、カワラハンミョウなどがあります。これらの昆虫は河原に生息する理由によって、大まかに2通りのタイプに分けられます。

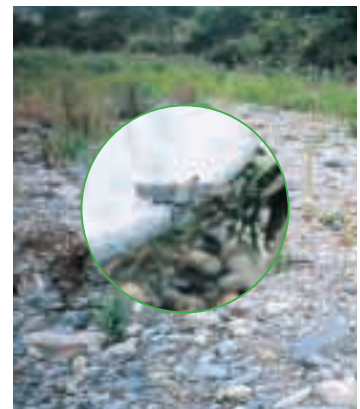
まずひとつめは河原に生育する植物を餌としている種です。例えば、ツマグロキチョウはカワラケツメイのみ、ミヤマシジミはコマツナギのみを幼虫の餌としています。これらの植物は河原に多く生育しているため、それを餌とする昆虫も河原に生息するようになったと考えられます。

もうひとつは、乾燥した裸地的な環境を好むために河原に生息する種です。例えば、

カワラバッタの近似種は中央アジアの砂漠を中心に分布していることから、内陸の乾燥した環境に適応して種分化したと推測されます。しかし、湿潤な日本では生息に適した環境は維持されにくく、その中で比較的類似した環境である河原に生息場所を移すことで種を維持してきたと考えられます。また、河原を構成する材料によって生息する種は異なり、同じ河川でも、カワラバッタは玉石河原に、カワラハンミョウは砂地に限って生息しています。

これらの昆虫の生息環境は、本来の河川環境の特徴とも言える洪水による河道の変更や河川敷の裸地化、植生の破壊が起き、そこからの植生の回復がくり返されるといったシステムによって維持されています。

[須田真一(東京大学保全生態学研究室/前土木研究所 環境部 緑化生態研究室)]



乾燥した裸地的な環境を好むカワラバッタは、河原に特徴的に生息している。